



一九九四年には村立の陶芸研修所も設置され、現在は全体の敷地規模や道路整備、各工房の環境づくりに配慮しながら共同施設の整備や、観光客への対応などが「ヤチ



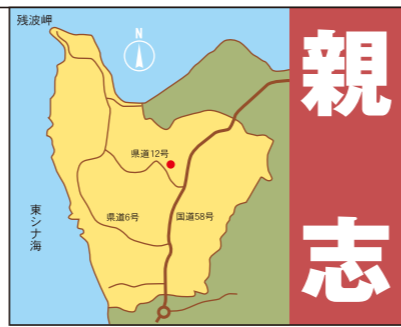
読谷村共同販売センター



旧親志集落



画：宮平 良秀



親志

プロフィール

親志は、一八七九年の廃藩置県後、多幸山近くの山間部に土族層が入植し、比較的新しい屋取集落として形成されました。しかし、沖縄戦後米軍基地に接収されたため座喜味から喜名までの間の現在地に移転を余儀なくされました。

現在、親志は県内でも有数の陶芸の産地となっています。一九七二年に金城次郎氏（人間国宝）が登窯を構えて以降、伝統陶芸の復活を目指して「ヤチムンの里」構想が立案され、陶芸家が集住、八〇年には読谷山焼の共同登窯が開かれました。さらに、一九九二年には県内最大を誇る十三連房の北窯が開かれ、毎年十二月に開催される陶器市では県内外からのヤチムンファンで賑わっています。



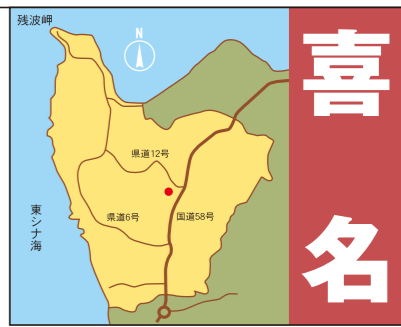
灯籠坂



ムンの里」全体計画で位置付けられています。また、国道沿いには本村の伝統工芸を展示販売する共同販売センターやアロハゴルフセンター、沖縄ハム総合食品（株）の本社工場が立地しています。将来、北側山間を通過する「読谷道路」の整備が予定されています。親志は、これまでの住宅開発や、今後の「読谷道路」の整備によって、親志から北側の山林地域が転換期を迎えつつあります。



また喜名は、古窯「喜名焼」発祥の地であり、喜名小学校南側の住宅地に喜名焼窯跡が埋まっています。喜名焼は、壺屋（那覇）に各地の窯場が統合される一六八二年以前の「一六七〇年前後に焼かれた読谷山独特の焼物です。沖縄戦後、喜名地域東部が米軍基地に接収されたため、住民は国道五八号西側の現在の位置に移転を余儀なくされ、今日に至って



喜名

プロフィール

喜名は、街道筋に立地した古い集落であり、那覇から山原への交通の要衝地として近世に読谷山間切番所が置かれ、宿場町として栄えました。その後、間切番所は間切役場（一八九七年）、読谷山村役場（一九〇八年）に改められました。そこには戦前までは村役場があり村の中心的役割を担っていました。

地名としては、『おもろさうし』に「きなわ大みや（喜名大庭）」、『絵図郷村帳』（一六四六年）には「きな村」、『琉球国高究帳』（十七世紀中頃）に「喜那」と見えます。一八五三年六月三日、ペリー艦隊から派遣された調査隊一行が間切番所に立ち寄った際、村人が温かく迎えたことが記録に残されています。



喜名の伝統芸能「村の栄」

EAST GATE OF YOMITAN



現在の国道西側緑地帯を、将来返還が予測される東側の軍用地跡地利用と関連付けながら、東西を合わせた有効利用を進めています。読谷村の花いっばい、美化運動はここから始まっており、国

喜名番所跡を整備

読谷山の行政の中心的役割を果たし、戦火によって焼失した喜名番所が、二〇〇五年四月、観光案内所、休憩施設、交流の場として誕生しました。同番所隣は道の駅に登録され、村内の名所、特産物、観光等の情報発信地となっています。



喜名の伝統芸能「忠臣護佐丸」

道沿いの花壇は、日本道路協会「道路功労者表彰」、全国「緑の愛護」で国土交通大臣表彰を受けるなど、環境緑地帯、人々のレクリエーションの場として、さらに読谷村の東の玄関口として整備が進められています。